

## 歴史教育における規範反省学習の授業開発

—小单元「近代日本の身体観と国民化～規範が持つ権力を考える～」の場合

History Study based on Norm Reflection :

For Reflective Thinking about the Power Structure that Social Norm Creates

梅 津 正 美

(鳴門教育大学)

### I 本研究の目的

本研究の目的は、規範反省学習の授業構成論とそれにもとづく歴史授業開発モデルを提案することを通して、従来、国家・社会の進歩・発展の理念とそれを体現した人間（個人・集団・組織体）の行為を正当化する規範を子どもに注入して、「国民形成（国民化）教育」としての性格を強くもってきた社会科・歴史教育を、「市民形成教育」へと変革する学習のひとつのあり方を示すことにある。

### II 規範反省学習の構想：定義と動機

規範反省学習とは、時代の社会構造がつくり出す規範が、生活者の行為とその社会的意味に差異をつくり出してゆく過程と、そうした差異によって、人間相互の支配と被支配、包摂と排除の関係が多層的に組み込まれた社会関係のあり方を解明することを通して、子どもが抱える規範と行為のあり方を反省的に吟味し、再定義していく学習である。この学習が形成をめざす市民像は、「自省する市民」である。<sup>1)</sup>

規範とは、社会の成員としての行為の拠るべき基準である。規範は、特定の状況のもとで、ある地位にある人に期待される行為により具現化する。ここでの地位とは、職業や職階における上下関係を表すものではなく、他者との関わりにおいて社会の中で自己の立場を明示する成員カテゴリーを意味している。<sup>2)</sup> 規範反省学習において学習の対象・内容となる規範は、上記の一般的定義をふまえて、さらに次の3つの主な性格・機能を持つものにとらえ、授業開発に活かしていく。<sup>3)</sup>

①規範は、時代の社会や状況下で「言語（語り）」によりつくり上げられたものである。従って、規範は歴史的な性格を持つ。

②規範は、集団や諸個人を無自覚のうちに社会構造へ取り込み、さらには社会構造を維持し正当化する主体へと形成していく権力を発動する。

③規範は、ふさわしい行為の達成を基準に、集団・諸個人を正常（普通）／異常、妥当／非妥当などに分類する働きを通して、非対称な（力に偏りのある）社会関係をつくり出す。

では、今なぜ規範反省学習を主張しようとするのか、その動機の背景をなす筆者の「現代社会観・人間観」について述べる。まず、筆者は、現代社会を「社会関係が分裂し、民主主義の基盤が揺らいだ社会」と認識している。そして、そのような社会をもたらした主な要因として、次の3つのことを念頭に置いている。第1は、高度情報化と消費主義の進展である。人々の欲求が多様化し、個人にはいろいろと実行したいことや欲しい物があり、それらについての情報（言葉）はあふれているが、自己の欲求を他者との関わりからみつめ整序し、優先順位をつけて選択することができにくい。消費を促す言葉に惑わされ、人々は常に欲求をめぐる不安や不満をかかえ、互いに繋がることのできないのである。第2は、私生活主義の蔓延である。「私」としての生活の快適さの追求を第一の信条とし、政治的・社会的な関係のなかに自己が存在しているというリアリティも当事者意識もない人々が増殖しているのではないか。第3は、新自由主義（ネオリベリズム）にもとづく社会編成の広がりである。「小さな政府」論と市場原理主義を基盤に、競争を促し、自己責任とい

う価値観のもとで社会的格差を是認していく国家・社会のあり方が、成員の連帯を阻み分断しているのである。

分裂した社会関係の中であって、行為の選択に悩む個人は、しばしば社会のなかの影響のある個人・集団・組織（例えば、政府、政党、マスメディア、学校など）により「よいと言われていること」を「よい」と判断してそれに従った行為を行っている現状がある。つくり出された規範は、国家・社会の成員をそれに「従う者/従わない者・従えない者」に分類する権力作用を持つ。その権力作用の行使は、支配と被支配、包摂と排除の社会関係をつくり出す。問題なのは、私たちが、特定の規範を選択し常識化し、自ら進んでそれに従うことにより、そうした非対称な社会関係（社会の権力構造）を再生産していることである。<sup>4)</sup>ここに、民主主義社会を担う市民が、規範を絶えず反省的に吟味し、再定義を試み、自らの行為を状況に応じて組み立て直していく能力（規範反省能力）を持つことの必要性が生まれてくるのである。

### Ⅲ 規範反省学習の授業構成論

規範反省学習の授業構成論は、目標・内容構成・授業過程の組織・学習方法の選択について次のように説明できる。

#### (1) 目標

目標は、規範反省能力を育成することである。規範反省能力とは、規範が社会関係においてもつ意味や機能（権力作用）を批判的に解明することを通して、自己の拠る規範を反省的に吟味し、再定義していける能力である。

#### (2) 内容構成

学習内容は、次の2つの原理にもとづいて構成する。

第1は、規範と時代の社会構造との相互の関わり合いを捉えるように内容を構成するというものである。

第2は、生活者の行為の意味づけを通して、規範がつくり出す社会関係における序列化と不平等を捉えるように内容を構成するというものである。

学習の主題・対象となる規範を選択する枠組みとして、性（ジェンダー）、人種・民族、階層・

階級、世代（年齢）、身体、地域を活用する。これらは、社会における個人・集団の地位を示すカテゴリー（成員カテゴリー）である。先に論じたように、規範は地位と結びつくことにより社会生活の中で具体的に把握することができる。規範反省学習は、規範と時代の社会構造との関わりとその関わりの中で生まれる抑圧・差別の社会問題とを主な学習内容とするが、それらは本来不可視のもので認識することが難しい。子どもが、それらを社会生活の現実在即して具体的・経験的に認識していくために、成員カテゴリーは、主題となる規範選択の有効な枠組みになると考える。

#### (3) 授業過程の組織

授業過程は、基本的に次の4段階をふんでいく。

第1段階：時代の社会や特定の歴史状況における生活者の行為を規定する規範の把握。

第2段階：規範と時代の社会構造・システムとの相互の関わり合いの分析。

第3段階：規範がつくり出す社会関係のあり方とそこから生じる社会問題の批判的解明。

第4段階：自己が拠る規範の反省的吟味と再定義。

#### (4) 学習方法の選択

規範反省学習は、説明・理解・討論を学習方法の原理として用いる。本学習論の認識内容（学習内容）と授業過程の構成から、これら3つの方法は必然的に必要となる。説明は、授業過程の第1段階から第2段階の主な方法となる。これらの段階では、子どもたちが、「なぜか」「その社会的背景は何か」といった問いに対して、諸資料を読み、解釈することを通じて、時代の社会に特徴的な規範が出現した理由・根拠を、時代の社会の構造・システムと関わらせ因果的に説明する。第2段階から第3段階の展開では、理解の方法が組み込まれる。時代の社会の人々が、規範をどのように意味づけ行為を選択したか、規範の意味づけが人によってどのように異なり、序列化や不平等・差別が生まれたかを解明するために、当時の人々の行為や意識が具体的に表現された回想録・インタビュー・新聞・雑誌記事などを教材に用いて、行為の意図や意味、その結果を読み解いていく。授業過程の第4段階では、社会問題を克服する方向で規範の再定義をするために、クラス討論を行う。

#### IV 規範反省学習の特質と位置

規範反省学習は、規範を媒介に、社会問題を生み出す行為と時代の社会構造との関係を分かることを学習の中心課題とする。規範反省学習は、「社会認識教育としての社会科」のひとつに位置していると主張したい。規範反省学習における主な学習（社会認識）内容は、「時代の社会構造は、特定の（時代の社会において支配的な）規範をつくり出し、人間に押しつけてくるが、その一方で、人間がその規範を無自覚に受け入れ常識化して行為を選択すること（自発的服従が生じること）により、その社会構造と不平等な社会関係を再生産する。」というものであった。こうした学習内容の把握の仕方は、「行為と社会構造は相互に影響し合う関係にある」という社会認識論に依拠している。<sup>5)</sup>

従来、社会科授業論は、「人間の行為と社会構造」とをどのような関係にあるものとして子どもにつかませるのかという問い（社会認識論）を視点に検討すると、二元論的な対立の中でそれぞれの位置を主張してきたように考えられる。二元論の第1類型は、「人間の意図的な行為により社会の仕組みが構成される」という認識をもとにする学習論である。行為の意味理解学習（共感的理解学習）<sup>6)</sup> がこれにあたる。この学習論は、問題解決的な人間（個人・集団・組織体）の行為の目的・手段・結果・意義の連関を、追体験を方法原理に共感的に理解していく。国家・地域社会の発展に尽くした人間行為の意味と意義を習得させるこの学習の形成したい市民像は、「国家・社会に適応する市民」と言えよう。第2類型は、「社会構造は行為に対して外在的であり、行為は社会構造によって制御される」という認識に拠る学習論である。概念探求学習<sup>7)</sup> や理論批判学習<sup>8)</sup> はこの型である。これらの学習論は、行為や社会問題を規定する社会の構造・システムを説明する概念・理論・法則（科学的知識）を、仮説の批判的吟味・修正の過程としての批判的学習を通して習得させる。マクロ社会の構造やシステムの分析・説明に力点を置き、形成したい市民像は、科学者の視点・方法をふまえて「批判する市民」であると言えるのではないか。社会構造・システムを規定要因と

する社会問題を学習問題・内容として扱う合理的意思決定学習<sup>9)</sup> も、やはり第2類型の学習論として位置づけることができる。

筆者は、規範にもとづく行為の意味づけが図らずも生み出す社会的な差別・抑圧の問題を探究する規範反省学習の立場からみて、両類型の学習論は、社会的な序列化・不平等・差別の問題を、「個々の行為者の意図や意識の問題」や「社会の構造や仕組みの問題」に解消してしまうことにより、社会問題に対する自己言及性が弱く、子どもたちの認識は、当事者意識を欠くことになるだろうと考えている。

近年、池野範男氏を主唱者に、社会形成としての社会問題学習が提案されてきている。<sup>10)</sup> その授業構成原理は、次のように整理することができる。①社会問題は、あらかじめ在るものではなく、人々の言語行為（クレイムの申し立て）により発見されたものである（社会問題の構築主義）、②社会問題学習の意義は、子どもが、社会的・歴史的事象を事例にして、社会問題に対する解決法の正当化の手続き・過程を批判的に吟味し、新たな価値規準や代替案をつくり出すことを通して、子どもに当事者として社会のあり方を構成させることにある、③学習方法原理は、批判と根拠づけを行う討論である。社会形成学習が構想する市民像は、「討論する市民」である。

規範反省学習は、社会問題の構築主義に依拠する点、学習者を社会問題の当事者に位置づける点、社会問題の解決に資する規範・行為あるいは制度・政策のあり方を吟味する点、において社会形成学習との近接性を持っていると言える。しかし、社会形成学習は、社会問題の解決策をめぐる「討論の構造」の発見・吟味・提案の実践それ自体に重きをおいていると見ることができる。一方で、規範反省学習が中心的な認識内容に定める、規範・価値、制度・政策の過去社会と現代社会との比較を通じた特質の解明や、それらと時代の社会構造との相互関係の分析・吟味は、社会形成学習においてはほとんどなされていない。<sup>11)</sup> こうした点で、規範反省学習と社会形成学習とは位置づけを異にする。

## V 規範反省学習の授業開発

授業開発モデルとして、高校日本史単元「近代日本の身体観と国民化～規範がもつ権力を考える～」を提案する。<sup>12)</sup> 表1に具体的な教授書(試案)を示した。本単元の学習対象は、大正デモクラシー期(1900年前後～1920年代)と総力戦体制期(1930年代～1945年)の「健康」規範である。

導入では、まず「健康」規範が言葉のやりとりによりつくり上げられたものであることを、子どもたちの生活経験をふまえてつかませる(概念的説明的知識 a-①)。「皆さんや皆さんのご家族は何か健康によいことしてますか」と発問して子どもたちの健康実践を上げさせた後、さらに「そうした実践がなぜ健康によいと判断したのですか」と問う。この一連の発問を通じて、①「健康」は規範であり、あらかじめ「よい、わるい」という価値をもって私たちにある行動を促したり、禁止したりすること(資料1・2活用)、②「健康」は、一般的・普遍的に定義することができないこと、③それでも私たちがお互いに納得できる「健康によいこと」を指摘できるのは、専門家(医者や栄養士、教師など)やマスメディア、あるいは国家(政府)の政策などを通じて「健康によいと言われていること」を私たちが「よい」と判断して実践していることを把握させる。そして、授業過程に対応した4つの学習問題を提示して、単元の学習全体の見通しを示す。

パートⅠは、時代の「健康」規範を把握することがねらいである。学習問題は、「大正デモクラシー期と総力戦体制期において、「健康」や「身体」に関する規範は、どのような「語り」(メッセージ)として示されたか」である。大正デモクラシー期の「健康双六」(資料3)や「資生堂石鹸の広告」(資料4)を読み解釈して、この時代に「体質改善」規範が普及したことをつかむ。また、総力戦体制期の「体力章検定・体力検査票」(資料5)と「女性美についての新聞記事」(資料6)から、この時代の「体力増強」規範を読み解く(個別的説明的知識 b-①)。

パートⅡでは、時代の「健康」規範と社会構造・システムとの相互の関わり合いを分析していく。学習問題は、「それぞれの時代の「健康」規範は、

時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか」である。子どもたちは、大正デモクラシー期については、学習問題に対して2つの観点から追求していく。1つは、人々に健康を意識させるリスク要因としての「死に至る病」の観点である。まず、1900年前後の時期に、「亡国病」とも呼ばれた結核が、工業化、都市化とそれらに伴う社会的格差の拡大を背景に蔓延したことを理解する(資料7活用)。次に、「結核予防のポスターのコピー」(資料8)と「政府の結核予防策」(資料9)を解釈して、結核の蔓延が兵力の弱体化と労働力の減少を招き国益を損ねると考えられたことを把握する。そして、伝染病の予防と健康維持を主題に、人々に日常生活の改善を啓蒙するための催しであった「衛生展覧会」を見た小学生の感想文(資料10)を読み解釈して、伝染病がもたらすリスクを強調しつつその回避のための手立てを具体的に示す展覧会のメディア発信により、国家・社会にとって都合のよい「体質改善」規範や「健康な生活習慣」が子どもにまで無理なく浸透し常識を形成していることを学習する。2つには、薬と美容の日常化の観点である。「メンソラ広告」と「資生堂の化粧品販売店舗(写真)」(資料11)から、この時代、身体に特に不調が無くても飲んだり塗ったりする常備薬と化粧品が流行したこと、その背景には帝国形成、工業化、都市化、大衆社会化などを観点とする時代の社会変動があったことを理解する。さらに、こうした社会変動の中で生まれた都市の新中間層が、マスメディアを媒体に広まった文化・モダン・美しさの追求という価値観を、自らの地位表示という動機に支えられて、受け入れ、常備薬と美容を生活習慣の中に組み込んでいったことにより、「体質改善」規範が正当化され維持されたということを学ぶ。

総力戦体制期については、資料12により総力戦の概念規定をした後、構造図(資料13)を活用して日本の総力戦体制の特質とそのもとでつくり出された「体力増強」規範を理解する。そして、その規範が、家族・学校・マスメディア・地域を媒介にして、「兵士として戦う性」である男性と「兵士を産み育てる性」である女性とに対して性



役割にふさわしい健康実践を促したことをつかむ（資料14・15・16活用）。続いて、「徴兵検査を受けた男たちの回想」（資料17・18）を読み解いて、総力戦体制を背景につくり出された「体力増強」規範が、一般の人々の「一人前に見られたい」「世間に顔向けができる」という価値意識を基盤に正当化され維持されたことを学ぶ。こうした個別的な解釈（個別的説明的知識b-②③）を概括して、パートⅡで子どもに最終的につかませたいのは、「規範の権力作用」に関する概念的説明的知識（a-②）である。

パートⅢでは、時代の「健康」規範がつくり出す社会関係のあり方とそこから生じる社会問題を批判的に解明する学習を展開する。学習問題は、「大正デモクラシー期の「体質改善」規範と総力戦体制期の「体力増強」規範とは、時代の社会の人々をどのように結びつけ、逆にどのように分裂させたか。そうした社会関係からは、どのような問題点を引き出せるか」である。性別、ハンディキャップ（病気や身体障害）、人種・民族、地域を枠組みに人間類型を設定し、それぞれの地位・立場にあった人々に対して時代の「健康」規範が作用した結果、彼らに「異常な者」「役に立たない者」「妥当でない者」といった分類のラベルを貼り、彼らを序列化し、排除していく（差別する）構造をつくり出したことを理解する（資料19～26活用）。そして、そうした差別の構造は、一般の人々が時代の「健康」規範を常識化しそれにふさわしい行動をとることを通して正当化され維持されていることをつかむ（個別的説明的知識b-④⑤）。パートⅢで最終的に到達することをめざすのは、「規範による序列化と不平等の社会問題の構築」に関する概念的説明的知識（a-③）である。

パートⅣでは、現代社会の生活者としての自己が抱える「健康」や「身体」に関わる規範を反省的に吟味して、問題を洗い出し、それを克服する方向で規範の再定義する。本パートの一連の学習問題は、「現代の「健康」規範をめぐって、それはなぜ提案されてきたか。なぜ社会に定着したのか。」「その規範をめぐって、私たちの社会生活でも問題点を見出せるか。」「それはなぜ問題と言えるか。」「

そうした問題点を克服することをめざして、君たちはどのような「健康」規範を提案するか。」「その規範を主張する理由は何か。」である。1997年ごろから厚生省（当時）が導入し日本社会に広まった「生活習慣病」という言葉とそれを防ぐための「健康な生活習慣に関わる7つの観点」（喫煙・飲酒・運動・体重・睡眠時間・朝食・間食）を学習の対象にして、まずはこれら現代の「健康」規範に隠れている「健康の個人責任化」「病気の個人責任化」という意図や意味を読み解いていく（資料27・28活用）。そして、それらが「自己責任」を核心におく「新自由主義」の社会観にもとづく福祉社会観や少子高齢化の進行に伴う財政構造の変化を背景に提案されてきていることをつかむ（資料29・30活用）。次に、そうした「健康」規範や社会観が、私たちが病気など健康リスクの回避を望んで自ら進んで健康実践に励むことにより正当化され、家庭、学校、職場などあらゆる社会生活領域に偏在して定着していくことを把握する。問題把握では、子どもの生活経験を大切にして議論を進め、彼らに問題点を指摘させる。私たちが無理をしてでも健康増進に努めなければならないところに自然に追い込まれていく「健康至上主義」の広がりや、健康と医療をめぐる社会的格差の拡大、政府による医療・福祉政策の不十分さを隠してしまうことなどが観点になるのではないか。学習の最後には、問題解決を展望した「健康」規範やそれを支える社会観について話し合うクラス討論を行い単元を締めくくる。討論は、「寛容」「共存」「共生」といった価値を基盤に展開するであろう。

## Ⅵ 提言－おわりにかえて－

一般に、規範学習というと、規範を「守るべきルール」「国家・社会の一員としての望ましい態度・行動」という道徳律として捉え、規範の遵守を子どもたちに教え込んでいく学習（規範注入学習）として理解されていよう。「最近の若者は規範意識が欠如している」という問題意識のもとで、道徳教育として展開する規範注入学習は、近年、学校カリキュラム全体を通じて強化されてきていると言える。<sup>13)</sup>

表 1. 小単元「近代日本の身体観と国民化～規範を持つ権力を考える～」教授書試案

1. 対象科目(時間配当)と単元の位置づけ  
 高等学校地理歴史科日本史A/B (5時間配当)  
 学習指導要領日本史A: 内容(3)イ「近代産業の発展と国民生活」又はウ「両大戦をめぐる国際情勢と日本」  
 学習指導要領日本史B: 内容(6)イ「政党政治の発展と大衆文化の形成」又はウ「第二次世界大戦と日本」
2. 単元の目標
  - (1) 能力目標  
 近代日本社会における「健康」と「身体」に関わる規範を事例にして、規範反省能力を育成する。
  - (2) 知識目標
    - a. 概念的・説明的知識
      - ① 規範は、時代の社会や状況の下で、様々な語りとしてつくり出される。
      - ② 規範は、集団や諸個人を無自覚のうちに国家・社会の仕組みや体制の内に取り込み、さらにそうした仕組みや体制を維持し正当化する主体へと形成していく権力を発動する。
      - ③ 規範は、ふさわしい行為の達成を基準に、集団・諸個人を正常(普通)/異常、妥当/非妥当などに分類する働きを通して、力に偏りのある社会関係をつくり出す。
    - b. 個別的・説明的知識
      - ① 大正デモクラシー期(1900年前後～1920年代)には「体質改善」規範が、総力戦体制期(1930年代～1945年)には「体力増強」規範が様々な語りとしてつくり出された。
      - ② 大正デモクラシー期は、帝国形成、工業化、都市化、大衆社会化が見られた日本社会の構造変動期であった。この社会変動の中で、国家(政府)、企業、マスメディアを通じて「体質改善」規範が発信された。その規範は、都市の新中間層を中核に大衆が受け入れ、規範にふさわしい生活習慣を定着させていったことにより、正当化され維持された。
      - ③ 総力戦体制のもと、戦争の遂行と勝利という目的のために、国家に管理されるかたちで「体力増強」規範が動員された。その規範は、家族、学校、地域、マスメディアを通じて作用し、国民の自発的な服従を引き出すことにより、社会に浸透し維持された。
      - ④ 時代の「健康」規範にもとづいて実践された人々の日常生活習慣が、結果として国家に管理され、「健康」を強制される身体を正当化するとともに、意図せずに他者を差別し排除する働きをした。
      - ⑤ 時代の「健康」規範が、妥当/非妥当、正常(普通)/異常の規範をつくり出し、「日本国民」を、普通の者と異常な者、役に立つ者と役に立たない者、というように序列化し、人々の間に分裂した社会関係をつくり出した。
3. 単元の構成

| パート: 授業過程                                | 学習問題  | 学習内容   |
|--|---|--|
| 導入: 規範の定義と単元の学習問題の提示                     | 「規範」と何か。  | 知識目標a-①  |
| パートⅠ: 特定の歴史状況における生活者の行為を規定する規範の把握        | 大正デモクラシー期と総力戦体制期において「健康」や「身体」に関する規範は、どのような語りとして示されたか。   | 知識目標b-①  |
| パートⅡ: 規範と時代の社会構造・システムとの相互の関わり合いの分析       | (大正デモクラシー期、総力戦体制期の)それぞれの時代の「健康」規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。  | 知識目標a-②<br>知識目標b-②<br>知識目標b-③                      |
| パートⅢ: 規範がつくり出す社会関係のあり方とそこから生じる社会問題の批判的解明 | 大正デモクラシー期から総力戦体制期にかけて、国家が必要とし、管理し、つくり出してきた「健康」規範は、時代の社会の人々をどのように結びつけ、逆にどのように分裂させたのか。時代の「健康」規範がつくり出した人々の社会関係からは、どのような問題点を引き出せるか。 | 知識目標a-③<br>知識目標b-④<br>知識目標b-⑤                      |
| パートⅣ: 自己が抱える規範の反省的吟味と再定義                 | 「健康」規範をめぐる、私たちの社会生活でも同じような問題を見出せるか。それはなぜ問題と言えるか。そうした問題をふまえて、私たちは自分の行為の拠り所となる規範の選択や人と人との関わりについて、どのような見方・考え方を持つ必要があると考えるか。        | (例) 健康・病気の個人責任化と社会的格差の拡大、医療・福祉政策の不十分さの隠蔽「健康」規範の再定義 |

4. 授業展開(紙幅の都合で、パートⅡとパートⅢのみを示す)

|                          |  |                   |        |  |
|--------------------------|--|-------------------|--------|--|
| Ⅱ<br>規範と時代の社会構造・システムとの相互 | ○それぞれの時代の「健康」規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。   | T. パートⅡの学習問題を提示する |        |  |
|                          | ○資料3・4がよく表していた大正デモクラシー期の「体質改善」の規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。                                 | T. 発問する           | 3<br>4 |  |
|                          | ・人が健康を意識するのは、病気など自分の身体に不安や危険があることを意識するからであろう。20世紀に入るところから、人々の命を脅かし、後に「亡国病」といわれた感染症が流行った。それは何か。その病の症状はどのようなものか。 | T. 資料をもとに説明する。    | 7      | ・結核。結核菌による慢性感染症。発熱と喀血が典型的な症状である。結核の初感染は、まず肺で起こる。   |
|                          | ・結核が流行った社会的な背景は何か。   | T. 発問する<br>P. 答える | 図説資料   | ・1900年前後から、日本の工業化と都市化が急速に進んだ。工場や事務所などが集中する大都市や産業都市には、農村部から多くの労働者が集まってきた。埃や湿気まみれの職場での長時間労働や密集した住居での暮らしは、結核菌の温床となっ |

・結核予防会のポスターに「結核ない国強い国」というコピーがある。この時代の「強い国」の条件は何だと考えられるか。結核の流行は、「強い国」をつくる上でなぜ問題なのか。

T. 発問する  
P. 答える

8

た。結核は、帰郷した都市労働者を通じて農村部にも拡がった。

・日露戦争以後、列強の仲間入りを果たした日本にとって、「強い国」とは、強い軍勢力と経済力をもつ国のことであった（富国強兵）。結核により兵力が弱体化し、労働力が減少することは、大きな問題だと考えられた。

・国家（政府）は、どのような結核対策を講じたか。

T. 年表をもとに説明する

9

・（結核対策年表）1904年内務省令「肺結核予防ニ関スル件」、1911年「工場法」、1914年「肺結核療養所設置法」、1919年「結核予防法」、1937年「保健所法」。  
・これらの予防対策の過程で、「ツベルクリン反応検査とレントゲン検査、およびツベルクリン陰性者に対するBCG接種」という日本式結核予防対策の柱ができた。

・こうした法の整備や予防医療の実施とは別に、県市や民間団体が主催した「衛生展覧会」が、全国を巡回して伝染病や健康に対する人々の意識や考え方に大きな影響を与えた。衛生展覧会を通じて、人々が学び受け入れた伝染病と健康に対する意識や考え方は、どのようなものだったのか。衛生展覧会に参加した小学生の感想文から読み取ろう。

T. 発問する  
P. 答える

10

・伝染病は社会全体の迷惑である。  
・病気の原因や治療について、迷信を信じてはならない。医学に裏付けられ、国が資格を与えた医療を信じること。  
・伝染病は、人々に恐怖と肉体的な苦痛をもたらすだけでなく、社会全体に経済的な損失をもたらす。  
・自分の身体のことには気を配り、伝染病を防ぎ健康を維持してこそ、身を立て、幸福な人生を送ることができる。

・この時期、都市を中心に流行った物が、家庭常備薬と化粧品である。具体的にはどのようなものが出回るようになったか。

T. 資料をもとに説明する。

11

・例えば、「重宝薬メソソラ」。広告によれば、メソソラは、外傷や神経痛、皮膚病などに「著効」があるばかりでなく、流感・肺炎の「予防」、肌に塗ると「美容」の効果もあると唱っている。  
・「資生堂」は、1872年に東京・銀座で薬の製造・販売業からスタートしたが、19世紀末には化粧品の製造に乗り出し、大正デモクラシー期には、化粧文化のメッカとなった。

・常備薬や化粧品は、結核のような病気により命が危ぶない状況で必要なものではない。無ければ無いでよいものである。にもかかわらず、この時期、常備薬や化粧品がなぜ流行したのか。これらを、買い求めたのはどのような人々だったのか。常備薬や化粧品についての知識や情報は、どのように広められたのか。これらの生産を支えた時代背景は何か。

T. 年表をもとに説明する

図説資料

・資本主義の発達の中で、都市には新中間層、いわゆるサラリーマン層が成長してきた。また、女性たちの中からも「職業婦人」が生まれてきた。サラリーマンとその家庭や新興の職業婦人達が、常備薬や化粧品の消費を支えた。  
・マスメディアの発達で、常備薬や化粧品の広がりには大きな役割を果たした。新聞広告や女性に人気の雑誌、著名人による講演などが宣伝効果を発揮した。  
・日本では、第一次世界大戦以後、資本主義が急速に発達する。そのなかで特に発達した部門のひとつに化学工業製品、なかでも薬品と肥料の製造があった。

・身体に特に不調がなくても飲んだり塗ったりする常備薬や化粧品の消費を支えたのは、都市の新中間層だった。彼らは、「健康」や「身体」について、どのような価値観や規範を持つようになっていたか。そうした価値観や規範を持つにいたる彼らの動機はどのようなものだったのか。

T. 発問する  
P. 答える

図説資料

・彼らは、「文化」「モダン」「美しさ」と健康やかさの発展を価値の基準におき、ただ生活できること、病気でないことを超えて、自らの生活の質や体質の改善に強い関心と意欲を持った。  
・そうした価値や関心・意欲は、彼らが自らの地位や立場を社会に明示したいという動機に支えられていた。彼らが受け入れ、身につけた「体質改善」の規範が、常備薬や化粧品の消費を支え、薬と美容の日常化を促した。

○大正デモクラシー期の「体質改善」の規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。

T. 発問する  
P. 答える

・大正デモクラシー期は、帝国形成、工業化、都市化、大衆社会化が見られた近代日本の社会変動期であった。この社会変動の中で、国家（政府）、企業、マスメディアを通じて「体質改善」規範が発信

|                           |   |   |                   |   |
|---------------------------|---|---|-------------------|---|
|                           |   |   |                   | された。その規範は、都市の新中間層を中核に大衆が受け入れ、規範にふさわしい生活習慣を定着させていったことにより、正当化され維持された。   |
|                           | ○資料5・6がよく表していた総力戦体制期の「体力増強」の規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。   | T. 発問する   | 5<br>6            |   |
|                           | 日中戦争・太平洋戦争は、日本にとり「総力戦」として遂行された。<br>・総力戦とは何か。<br>・日本の総力戦体制とは、どのような仕組みをもっていたのか、資料をもとにまとめてみよう。   | T. 発問する<br>P. 資料をもとにまとめ発表する                           | 図説資料<br>1 2       | ・総力戦とは、「国家・国民の物質的精神的総力を動員結集して、これを国家の総力として戦争に臨むこと」である。<br>・日本型の総力戦体制とは、価値観・イデオロギーとしての国体論・家族国家観とそれを具体化する社会の基本単位としての家父長制家族を基盤に、非常時に対応した戦時政治・経済体制と国民動員体制から成っていた。                    |
|                           | ・この総力戦体制のもとで、政府は、国民の「体力」を動員するためにどのような政策をとったか。   | T. 資料をもとに説明する   | 1 3               | ・（国民体力動員政策年表）1935年健康優良児錬成国民学校表彰制度，1938年厚生省設置，1938年「国家総動員法」，1938年「国民健康保険法」，1940年「国民体力法」，1940年「国民優生法」，1941年「人口政策確立要綱」（多産奨励），1941年優良多子家庭表彰制度，1941年国民学校制のもと教科「体錬科」創設                |
|                           | 政府がとった「国民体力動員政策」を検討すると、政策の柱として、予防・早期治療・鍛錬・人口増殖を引き出すことができる。また、政策名や法律名に端的に表れているが、諸政策の評価の基準は、「優秀な体力の動員」にあるといえる。<br>・戦争遂行のために国家が求めた「優秀な体力」の中身は何だといえるか。<br>・「優秀な体力」の動員に、性別役割はどのように反映しているか。       | T. 説明する   |                   |   |
|                           | ・戦時下の「体力」規範を、国民一般はどのように受け止め行動していたのだろうか。   | T. 発問する<br>P. 答える                                     | 1 4<br>1 5<br>1 6 | ・戦争を遂行するための戦闘力・労働力・人口増殖力とそれらの基盤となる精神力<br>・男性は、「兵士」としての、女性は「母」としての観点から「優秀な体力」が把握されている。   |
|                           | ○総力戦体制期の「体力増強」の規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。  | T. 発問する<br>P. 答える                                     | 1 7<br>1 8        | ・多くの人は、「国家に尽くす」という強い意志によってというよりも、身近な人々との関わりや地域・集団の中で、「一人前に見られたい」、「世間に顔向けができる」という価値観に従って、「体力増強」の規範を受け入れ、それにふさわしい生活習慣を実践しているようだ。  |
|                           | ○総力戦体制期の「体力増強」の規範は、時代の国家・社会との関わりの中で、なぜ積極的に語られ、人々の間に定着し維持されたのか。  | T. 発問する<br>P. 答える                                     |                   | ・総力戦体制のもと、戦争の遂行と勝利という目的のために、国家に管理されるかたちで「体力増強」規範が動員された。その規範は、家族、学校、地域、マスメディアを通じて作用し、国民の自発的な服従を引き出すことにより、社会に浸透し維持された。  |
| III<br>規範が<br>つくり<br>出す社会 | ○大正デモクラシー期から総力戦体制期にかけて、国家が必要とし、管理し、つくり出してきた「健康」規範は、時代の社会の人々をどのように結びつけ、逆にどのように分裂させたのか。時代の「健康」規範がつくり出した人々の社会関係からは、どのような問題点を引き出せるか。<br>・性差を観点に、時代の「健康」規範が、人々をどのように結びつけ、また差別し排除したかを、資料を読み吟味しよう。 | T. パートIIIの学習課題を提示する<br><br>T. 発問する<br>P. 資料を読みまとめ発表する | 1 9<br><br>2 0    | ・大正デモクラシー期の「美」は、男性の立場・視線から論じられている。そのために、女性は常に「美」を強要される立場に置かれる。また、「女性美」は、年齢や社会的地位にふさわしい規範が示された。そのため、「家庭婦人」と新興の「職業婦人」との間で美や化粧をめぐる葛藤が生じた。<br>・成人した男子にとって、徴兵検査に甲種で合格することは、男として一人前の証 |

|                          |  |                                 |     |  |
|--------------------------|--|---------------------------------|-----|--|
| 関係のあり方とそこから生じる社会問題の批判的解明 |  |                                 |     | とされ、名誉なことと意識された。逆に、甲種合格できなかった者は、自分の身体に対する劣等感と周囲への引け目を感じるようになった。  |
|                          | ・ハンディキャップ（病気や身体障害）を観点に吟味しよう。   | T. 発問する<br>P. 資料を読み<br>まとめ発表する  | 2 1 | ・女性に、「健康」規範の実践を、「母性」を観点に評価された。健康・丈夫な子供を産み育てた母親が賞賛される一方、病弱・身体薄弱な子供を産み育てた母親は肩身の狭い思いを抱くことになった。            |
|                          |  |                                 | 2 2 | ・戦時下、ハンセン病者は、隔離に応じることによって「健民健兵」という国策に込められることになっている。病者は、隔離・排除を受け入れることによって、「健民」の心を証明せざるを得なかった。           |
|                          | ・人種・民族を観点に吟味しよう。   | T. 発問する<br>P. 資料を読み<br>まとめ発表する  | 2 3 | ・「戦時」にあって、女性は、健康で子供を産み育て、働くことのできる身体を持っていないといけない」という規範が、障害をもつ女性に、自分は国家や社会にとって何の役にも立たない者という疎外感を抱かせている。   |
|                          | ・地域・場所の観点から吟味しよう。  | T. 発問する<br>P. 資料を読み<br>まとめ発表する。 | 2 4 | ・大正デモクラシー期には、欧米の文化的優位を背景とした欧米人の身体美を基準に、日本人の身体美の特徴・優劣が論じられた。一方、戦時下では、欧米人の身体は、「墮落した肉体」の象徴とみなし、排除の対象とされた。 |
|                          | ○大正デモクラシー期から総力戦体制期にかけて、国家が必要とし、管理し、つくり出してきた「健康」規範は、時代の社会の人々をどのように結びつけ、逆にどのように分裂させたのか。時代の「健康」規範がつくり出した人々の社会関係からは、どのような問題点を引き出せるか。 | T. 発問する<br>P. 答える               | 2 5 | ・戦時下、朝鮮人は、「日本人」として戦闘力・労働力を発揮することを強制された。  |
|                          |  |                                 | 2 6 | ・都市では、新中間層を主体に衛生意識と文化的生活が定着してくると、不衛生、不潔、文化程度の低さ、伝染病の巣窟を観点に、スラム住民や被差別部落に対する蔑視と監視が強化された。                 |
|                          |  |                                 |     | ・時代の「健康」規範にもとづいて実践された人々の日常生活習慣が、結果として国家に管理され、「健康」を強制される身体を正当化するとともに、意図せずして他者を差別し排除する働きをした。             |
|                          |  |                                 |     | ・時代の「健康」規範が、妥当/非妥当、正常（普通）/異常の規範をつくり出し、「日本国民」を、普通の者と異常な者、役に立つ者と役に立たない者、というように序列化し、人々の間に分裂した社会関係をつくり出した。 |

【単元全体の教授・学習用資料・出典】

1. 「規範」の意味、『広辞苑』
2. 「健康」の誕生、福沢諭吉『学問のすすめ』
3. 健康に行く道―通俗衛生図解―、鹿野政直『桃太郎さがし』朝日新聞社、1995年、p.15
4. 資生堂の石鹸広告、同上書、p.23
5. 体力章検定・体力検査票、同上書、p.30
6. 戦時下、女性美についての新聞記事、井上章一『美人論』リプロポート、1991年、pp.158-159
7. 「肺結核」『家庭医学大事典』講談社、1995年、p.314
8. 結核ない国強い国（結核予防会ポスター）、鹿野政直、前掲書、p.32
9. 結核対策年表、鹿野政直、前掲書、pp.18-19より筆者作成
10. 衛生展覧会が子どもたちに伝えたこと、田中 聡『衛生展覧会の欲望』青弓社、1994年、pp.46-52より筆者作成
11. 重宝薬メンソラの新聞広告、鹿野政直、前掲書、p.22
12. 戦時経済体制の構造（図表）、東京歴史研婦人運動史部会『戦時下の日常生活とその崩壊』『歴史評論』407号、1984年、pp.36-37
13. 国民体力動員政策年表、鹿野政直、前掲書、pp.28-39より筆者作成
14. 徴兵検査（写真）、鹿野政直、前掲書、p.29
15. 健児を育てる母（アサヒグラフ掲載写真）、鹿野政直、前掲書、p.36
16. 母性のための結婚（内務省作成ポスター）、鹿野政直、前掲書、p.37
17. 鳥取県出身男性Aの徴兵検査回顧、喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館、1999年、pp.109-110
18. 国民学校での子どもの生活と意識、黒羽清隆『太平洋戦争の歴史』講談社、2004年、pp.239-241
19. 美のくさり、成田龍一「衛生意識の定着と「美のくさり」」『日本史研究』366号、1993年、pp.82-83
20. 鳥取県出身男性Bの徴兵検査回顧、喜多村理子、前掲書、pp.127-128
21. 母性としての戦時を生きた女性の回想、鹿野政直、前掲書、p.37
22. ハンセン病隔離施設所長の健民健兵思想、藤野 豊『強制された健康』吉川弘文館、2000年、pp.187-188
23. 障害児として戦時を生きた女性の回想、朝日新聞社『わたしの太平洋戦争 第3巻』朝日新聞社、1992年、pp.228-229
24. 日本人の身体美の抽出、成田龍一、前掲論文、p.85
25. 強制される「志願」―朝鮮人特別志願兵制度―、吉見義明『草の根のファシズム』東京大学出版会、1987年、p.131
26. 伝染病対策―貧民部落の囲い込み―、安保則夫『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム』学芸出版社、1989年p.109
27. 健康増進法、『健康日本21』、<http://www.kenkouinippon21.gr.jp/>
28. 生活習慣病、『フリー百科事典 ウィキペディア』、<http://ja.wikipedia.org/>
29. 原因別死亡者数と医療費の推移、『朝日ジュニア百科 2008年版』朝日新聞社、p.205
30. 将来の人口推計、『日本国政図会(第65版) 2007/08』矢野恒太郎記念会、p.49



これに対して、筆者は、社会科教育としての規範学習は、「規範反省学習」でなければならないと提言したい。社会科教育の本質を、民主主義社会を擁護し発展させるための「対抗イデオロギー教育」<sup>14)</sup>として把握するならば、規範のもつ権力作用を分析・吟味し、差別・抑圧の社会問題の解決を指向して自己言及的に規範の再定義を促す規範反省学習は、まさにその教育のひとつであると主張したいのである。

## 注

- 1) 筆者は、本学会誌において、行為の反省学習を提案してきた。この学習論は、行為と時代の社会構造との相互の関わり合いの認識を基盤に、子どもが、歴史的行為の評価基準を構成して、それを鏡に自己の行為の再方向付けを図るというものであった。規範反省学習は、行為の反省学習を再構成したものである。「行為」という用語は、それが実体的で本質主義的なものという理解を生みやすい。だから、行為の反省学習と言えば、何か具体的な行為の修正・変更を促す学習と受け取られやすいと考えた。社会問題の構築主義の立場から、社会的に構築された規範が発動する権力作用こそ反省的吟味の対象にすべきとの考えに至り、規範反省学習として理論の再構成を図った。
  - ・梅津正美「状況における行為の反省過程としての歴史授業構成」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第9号、1998年、pp.1-11
  - ・梅津正美・平井英徳「行為の反省過程としての歴史学習」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第13号、2001年、pp.21-30
- 2) 「規範」の定義については、次の文献から学んだ。
  - ・前田泰樹他編『エスノメソドロジー』新曜社、2007年、pp.100-107
- 3) 権力作用を中心とする規範のもつ機能については、次の文献の内容を整理し引き出した。
  - ・山田富秋『日常性批判』せりか書房、2000年、pp.33-36
  - ・ガーゲン、K.J. (東村知子訳)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版、2004年、pp.300-303
- 4) 山田富秋、前掲書、pp.27-33
- 5) 規範反省学習が依拠する「相互関係主義の社会認識論」については、次の文献を参照されたい。
  - ・中村桃子『ことばとジェンダー』勁草書房、2001年、pp.90-95
  - ・田辺 浩「行為理論の革新」宮島 喬編『文化の社会学』有信堂、1995年、pp.14-39
- 6) 学習指導要領に準拠した小学校社会科学学習がその典型である。
- 7) 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、1978年
- 8) 原田智仁『世界史教育内容開発研究』風間書房、2000年
- 9) 小原友行「意思決定力を育成する歴史授業構成」広島史学研究会編『史学研究』第177号、1987年、pp.45-67
- 10) 池野範男「市民社会科歴史教育の授業構成」全国社会科教育学会編『社会科研究』第64号、2006年、pp.51-60
- 11) 池野氏らが開発した単元「武力行使は許されるか」では、国家安全保障・国際安全保障・人間の安全保障という異なる価値と武力行使の是非論とを結んで、「討論の構造」の発見・吟味・提案がなされている。討論のための事例に、真珠湾攻撃、ベトナム戦争、キューバ危機等が取り上げられているが、討論にあたり、それらの時代背景や歴史的性質、相違点の解明はほとんど考慮されていない。
- 12) 筆者は、ジェンダー規範を対象とした規範反省学習の歴史授業開発を先行して行っている。
  - ・梅津正美「国家学習の社会科授業」社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革』明治図書、2006年、pp.186-196
- 13) 改正教育基本法（2006年）がその目標の中で、「日本人」「国民」という枠組みを強調して「伝統と文化を尊重し、我が国の国土と郷土を愛する態度の養成」を述べていることは、近年の日本の国家体制側からの規範構築と教育における規範注入圧力の強化の事例と見ることができよう。
- 14) 森分孝治「対抗イデオロギー教育」『教育科学社会科教育』NO.359、明治図書、1992年、pp.119-124